

科目名	人体構造機能学 II (筋・骨関節系)	担当教員	伊藤 俊輔※ 鈴木 大輔 久保 勝幸※ ※印は実務経験のある教員を示す。
-----	---------------------	------	---

開講専攻	分野	種別	配当年次	開講時期	単位数	授業形態
理学療法学専攻 作業療法学専攻	専門基礎科目	必修	1年次	後期	1単位	演習
ナンバリングコード	卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連					
HR13C	②					

科目概要	骨格筋や関節の構造（解剖）と機能（生理）をについて学び、実際に触診や関節運動を体験する。また、触診で得た知識を形態計測という検査法を用いて体験する。
学習目標	骨・関節・筋の知識を深めること。特に実際の関節運動や触診を行うことによって、観察力と思考力を養い、学問的な探求心を向上させること。

回	項目	主な学習内容	学習目標	実務経験 教員担当 項目
1	体表解剖 1	オリエンテーション（触診、形態計測）	触診や形態計測の意義、目的について理解する。	伊藤
2	体表解剖 2	触診 1：上肢・上肢帯：骨、筋	上肢・上肢帯の骨、靭帯、関節や筋について触診を通して理解する。	久保 伊藤
3	体表解剖 3	触診 2：形態計測：上肢長、上肢の周径	上肢に関する形態計測ができるようになる。	久保 伊藤
4	体表解剖 4	触診 3：下肢・下肢帯：骨、筋	下肢・下肢帯の骨、靭帯、関節や筋について触診を通して理解する。	久保 伊藤
5	体表解剖 5	触診 4：形態計測：下肢長、下肢の周径	下肢に関する形態計測ができるようになる。	久保 伊藤
6	体表解剖 6	触診 5：体幹：骨、筋	体幹の骨、靭帯、関節や筋について触診を通して理解する。	久保 伊藤
7	筋学 1	筋学総論：筋を補助する構造	筋を補助する腱・支帯・腱鞘などを覚える。各構造の働きを理解する。	鈴木
8	筋学 2	筋学各論 1：表情筋、咀嚼筋	筋の名称、支配神経、起始・停止を覚える筋の働きを理解する。	鈴木
9	筋学 3	筋学各論 2：舌筋群、頸部の筋	筋の名称、支配神経、起始・停止を覚える筋の働きを理解する。	鈴木
10	関節学 1	関節学各論 1：顎関節・体幹の関節	顎関節・椎間関節の構造を覚える。各関節の働きを理解する。	鈴木
11	関節学 2	関節学各論 2：顎関節・体幹の関節	肋骨関節・椎間板の構造を覚える。各関節の働きを理解する。	鈴木
12	筋学 4	筋生理学 1	筋の微細構造について理解する。	鈴木
13	筋学 5	筋生理学 2	筋収縮のメカニズムについて理解する。	鈴木
14	筋学 6	筋生理学 3	筋と神経の関係について理解する。	鈴木

15	筋学 7	筋生理学 4	筋電図と疾患の関係について理解する。	鈴木
<b>評価方法</b>		筆記試験（100%）		
<b>課題に対するフィードバック</b>		<p>ここでの課題は、「授業内容の理解」とします。</p> <p>鈴木大輔担当分は、それに対して①-④のフィードバックを行います。</p> <p>① 授業後の確認テスト</p> <p>② 次の授業前の簡単な解説（出来が悪い確認テストの問題に対して）</p> <p>③ 個人的な対応（質問に対する回答や解説など）</p> <p>④ 期末テスト</p> <p>久保勝幸、伊藤俊輔担当分は、講義中・講義終了後に質問を受け、回答します（フィードバック）。</p>		
<b>教科図書</b>		F.H.マティーニ、他・著『カラー人体解剖学 構造と機能：ミクロからマクロまで』西村書店、2003年		
<b>参考図書</b>		<p>伊藤俊一、他・著『DVDシリーズ2 PT・OTのための測定評価 形態計測・感覚検査・反射検査 第2版』三輪書店、2014年</p> <p>林典雄・著『運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢 改訂第2版』メジカルビュー社、2011年</p> <p>林典雄・著『運動療法のための機能解剖学的触診技術 下肢・体幹 改訂第2版』メジカルビュー社、2012年</p>		
<b>学習の準備</b>		<p>1.（予習）可能であれば事前に教科書の該当箇所を通読しておくこと（15分）。</p> <p>2.（復習）授業中に配布した資料を見直し、専門用語の意味等を理解しておくこと（30分）。</p>		
<b>オフィスアワー</b>		月曜日と水曜日の10時～16時、その他在室時はいつでも可		
<b>担当教員欄に※印を附した教員の実務経験</b>		<p>伊藤俊輔は、民間病院で筋・骨関節領域における理学療法の実務経験を有しており、本講義において、その経験を活かしてより実践的な指導をすることができる。</p> <p>久保勝幸は、民間病院で筋・骨関節領域における作業療法の実務経験を有しており、本講義において、その経験を活かしてより実践的な指導をすることができる。</p>		